

一スのようです。地域のヘルススタッフは、コレラや破傷風が流行したときの様子を克明に憶えていて、当時の対策や中央の保健省、土地の人々の反応などを熱っぽく語ってくれ

ました。ここには灌漑施設に伴う住血吸虫症を予想して建てられた検査施設があつて、若干の細菌学的検査機能が備わっています。

Table 1: Infectious Diseases observed in the area

| | | |
|------------------|---------------------|-----------------|
| AMOEBIASIS | LEISHMANIASIS | SHIGELLOSIS |
| ANTHRAX | MALARIA | TETANUS |
| ASCARIASIS | MENINGITIS | TRYPANOSOMIASIS |
| BRUCELLOSIS | PNEUMONIA | TUBERCULOSIS |
| CHICKENPOX | RABIES | TYPHOID FEVER |
| CHOLERA | RESPIRATORY DISEASE | YELLOW FEVER |
| HOOKWORM DISEASE | SCABIES | |

Source: Marigat HC

note: ANTHRAX, BRUCELLOSIS, RABIES, TETANUS, TRYPANOSOMIASIS and TUBERCULOSIS are defined as 'Cattle association diseases' or 'Zoonosis'.

保健医療に使える資源としては、財源、人材、保健サービス施設のネットワークなどが相当します。政府の保健サービスと協調しているNGOを含めて、ヘルスセンターやクリニックの実態は比較的つかみやすいものでした。ただ、町にある純粋に民間の診療所はその影響の大きさがよくわかりませんでしたし、村の伝統的な保健スタッフの実像もかなり曖昧模糊としています。チャムスのようなかなり確立した保健の知恵を持っている部族では、いわゆる伝統的治療者(接骨医・産婆等)の存在感には相当のものがあると思われま

す。地域の周辺で、いくつかのコミュニティを対象にPRAの手法で調査を行いました。それぞれ構成する部族が異なったり、歴史が異なったり、結果はヴァラエティに富んでいるのですが、暮らしの問題に高い優先順位で「水」が上げられていることが共通しています。「安全な飲み水」と「灌漑用水」というように分けて表現をしたグループもありました。「水」は、「生きるために飲む水」と「食べ物を

得るための水」の両方を意味していました。どちらも保健に深くかかわる水です。地域のリーダーたちとのインタビューの中で、「生きるために飲む水」にはこんな意味が含まれていることがわかりました。まれに身体をこわすこともあるけれども、川の水は「大方」安全な水である。土地の人たちは、上流での汚染を警戒し、水を川から汲むときにも流れから直接汲むことは避け、流れのとなりの川床に穴を掘って、そこに染み出してくる一応ろ過された水を汲んでいる、といった工夫を行っているのです。チャムス族には、干上がったあとの川床に残された水や、一度干上がった川が再び流れ始めたときの最初に流れてくる水を飲むと病気になるといった「一般常識」がありました。1996年に突然M川の水が黄色くなってたくさんの魚が死んだとか、1998年にM川とP川の水を飲んでいて世帯ではコレラが流行したが、そのときにA水系の水を使っていた世帯は無事だったとかは土地の人たちの意識の中にしっかりと刻み込まれているようです。人々は、川の上流での洗車、洗濯、

水浴びに強い警戒心を抱いていました。日本人にも、「川の水を手にくくって飲む、そしてその飲み残した水を元の川に返す。」といったエコロジカルな生き方がかつてありました。

私たち外部のものには一見不毛の土地にも見える環境でも、土地の人たちには「生き延びる」ためのすべての資源をここで得ることができるのでしょ。幾代もの世代に渡ってこの土地に暮らしつづけている人々の歴史がその事実を強烈に示唆しています。ロイボーンが「祝福」しているのは、単にチャムス族の人々と牛たちだけではなく、彼らを取り巻く生態系そのものなのではないかと言う気がしてきます。その中にはコレラ菌やツェツェ蠅の存在も含まれているのではないのでしょうか。このような状況下にあつて、単純に狭い範囲で、ICDで分類定義されるような特定の疾病とか病原体の制圧・撲滅を目指すアプローチは最適解とはいえない気がします。土地の人たちの「健康」を向上させることができるのは、土地の人たちの「健康を望む意思」と「健康にかかわる知恵」が中心になるはずで。外部からの技術的なインプットは、土地の人たちの「知恵」に統合されなければなりません。

人々の求めている「安全な飲み水」に応えるため、土地の人々が共通に使っている水源の細菌汚染を地域の検査室で行うことと、それと絡めて最近の感染症の発生した状況を、若干の疫学的な感染経路の分析結果を含めてヘルスセンターから地域の人々に発信する活動をここで試行しました。

ヘルスセンターは臨床、公衆衛生、検査(主に病理検査室として機能)の三つの部門で構成されています。土地の人々にメッセージを伝えるメディアにはデジタルカメラの映像を含めて、スライドショーのプログラムを使いました。新しいメディアの導入は、特に地域にアサインされている公衆衛生スタッフに劇的

な変化を及ぼしました。やる気を失いヘルスセンターにも足の遠のいていたスタッフが、スライドショーを通して地域の人々とコミュニケーションすることにどんどん積極的になっていったのです。PHCが実現するためには暮らししている人々の声が聞こえるメカニズムが不可欠です。それは同時に保健従事者の側からの情報の発信と不可分の関係になっていることを改めて再確認しました。保健を計画する際に保健サービスを計画することに偏りがちですが、双方向のコミュニケーションをバランスよく取り込んでゆく発想の転換が重要ではないでしょうか。

参加型計画と評価：その問題と課題－国内と海外の事例より

石田健一

東京大学海洋研究所

Ocean Research Institute, The University of Tokyo

<要約> 国際協力、国内事業における「開発」に関わる多くのイシューは共通の問題と課題を抱えている。本報告では先ず海外における開発協力の事例を3例、及び、国内における事例を3例とりあげ、参加型開発における理論とその実践を比較した。続けて理論と実践間に生じている差異から考えられる教訓を提示した。最後に国際開発の歴史を背景に参加型開発での計画と評価における課題抽出を試みた。

<キーワード> 参加型開発, Capacity building, 計画と評価

1. はじめに

参加型開発における理論とその実践は両者の果実をフィードバックすることで進化してきたようである。海外における開発援助で培われたノウハウの蓄積、国内では政府公共事業実施を参加型で行う事といった前提条件が普及し始めた事を受けてその実践例は数多い。内容はともかく実践の数だけは急速に増加しているといえる。実態的には手法の一律的適用から生じる問題、開発への考え方の違いから起こる齟齬、わが国における参加型開発歴史性の浅さから生じる問題がある。そのような実態を通じて既に様々な課題が潜在的にまたは顕在的に示されているのが現状であるとも言える。ここでは、その事情を踏まえ参加型の論理（または手続き）とその実践状況に横たわる大きな溝を提示し、続けて今後のありかたを模索するものである。

2. 海外開発協力

3つの異なる海外協力プロジェクトを紹介しそれぞれの課題と教訓について議論する。

●保健医療分野

開発主体のほぼ全てをドナー側がカバーできたこと。

プロジェクト・サイクル・マネジメント（PCM）において問題分析の吟味が

徹底的になされたこと。パーセプションによる問題系図を開発主体とともに確認しながら内容を検証(validation)したこと。

プロジェクト開始後6ヶ月の計画期間をおき、プロジェクト範囲の現状調査を

開発主体と共におこなうことで既にcapacity buildnigが始まっていること。

●流域管理分野

PCMを用いることにより要の情報が抽出でき、その情報の現実化如何がプロ

ジェクト開始及び実施のキーであった

こと

●村落開発分野

参加型のステップを踏みながら、こちらからセットメニューを提供することの

意味

インテグレーションによる挑戦と限界

(森林プロジェクトと協力隊)

3. 国内での開発事例

開発における諸課題、諸問題は海外での開発協力だけに特有のものがあるのではなく国内外を問わず共通のものがある。たとえば、中央と地方の関係などである。そこで、此处では比較的住民参加型による計画・評価になっている例を取り上げ問題と課題の確認をする。

●棚田保全

開発主体者、協力者が現場にずっといつづけられる強さ

大学という機関、ローカルコンサルタントを使って総合的に調査できる強み

課題：日本に棚田は多い。その中でぬきんでれるのか。市民が払ってもいい

価格は

●バイパス道路敷設

行政による「市民のことは良くわかる」というパターンリスティックな態度
問題が顕在化しにくい性質

●フェリーターミナル跡地利用

海峡大橋建設を契機に廃止されたフェリー航路とフェリーターミナルビル。ビルを無償委譲された市当局
市民，市，県，国の出先機関のうち誰がどこが最初に利用規則を決めるか
前線現場から地方行政そして国まで
実施主体となれる人物がきちんと存在すること

4. プロジェクト・サイクル・マネジメント (PCM) 手法

日本の開発協力にプロジェクト・サイクル・マネジメント手法 (PCM) が導入されて10年が経過している。プロジェクト形成手法、評価手法としてビジブルな者としては本邦初とあっていいのであるが、本手法が適切な効果を発揮していない場面も少なからず見られる。以下にPCM手法の適用における問題と課題を主に計画時について簡単に箇条書きに述べる。

- ☆ プロジェクト・デザイン・マトリックス (PDM) に現わされる計画用語 (目標, 成果, 活動など) への開発における理解が無かったため生じた混乱
- ☆ PCMを用いた参加型計画 (PP) における個別分野専門家の役割がはっきりとは理解されないことからくる混乱。専門家がファシリテーターと住民や組織をつなぐインターフェイスになることの意義
- ☆ 参加型とロジックが同時に上陸した点
- ☆ PCMにおける参加型計画手法ではリニアに分析していくという誤解
- ☆ パートナーシップタイプvs決めるのも実行するのも評価するのも私達タイプ。2つの異なるアプローチへの適用
- ☆ PCMでは能力強化を表の目的として出せるか出せないか。

5. 能力開発

ここでは能力開発という分野の中で研修を取り上げて議論したい。以下に簡単に箇条書きにしてその課題を述べる。

- ☆ 誰のリアリティか
- ☆ 事例を使うことの功罪
- ☆ ニーズが無いところに作り出すことの怖さ。
- ☆ Uppers向けの研修とは

6. まとめと今後の課題

以上、参加型計画と評価における理論と実際の差異を開発経験より検討したが、此処では理論と実施手順を超えた課題について考えたい。以下に、箇条書きに簡単に述べる。

- ☆ 計画、実施、評価が切れていること。計画者は「作り逃げ」評価者は「言い逃げ」である現状。
- ☆ 計画や評価のフィードバックが直ぐに出来ない、後でも出来ない
- ☆ 評価される対象者が決まってない。特にリーダーを評価できない
- ☆ 開発の主体があやふやなままプロジェクトが始まること
- ☆ 個人は部分的な開発経験しか出来ないことによる欠点。協力隊、専門家、市民、行政、NGO
- ☆ PCMはあまりにも強力な手法なので考えることをやめてしまう (PRAもそうであろうか)
- ☆ 下位者 (Lowers) へのアプローチだけでなく上位者 (Uppers) へのアプローチはどうか
- ☆ 決めるのは私達、実行するのは私達、評価するのは私達が根付くには

7. 最後に

参加型開発は国際開発協力の中でもまれて変化、進化してきた部分が非常に大きいと考えられる。そのため、以下に国際開発協力の歴史を時代別に整理した。海外開発協力 (と

くに技術協力)では80年代のパートナーシップ型が主流であり一部先端的グループにより90年代型が試みられている。国内は70年代型である「住民参加」が主流であり、

一部80年型に移行して行きつつある試みも見られる。70年代そのものの姿勢で80年代型を実施しているところが大半では無いかと推察する

| 時代 | 一言で表現すると | 人間の行為にたとえると | 姿勢 | 主役テーマ | 開発は... |
|---------|--------------------|---|---|--|-------------------------|
| 70s | They | ・落とす。 ・狙う。 ・俺ならあいつのことがわかる | We can make them develop | <ul style="list-style-type: none"> Development Economics Centralized operation Paternalistic | For the people (group) |
| 80's | Us | <ul style="list-style-type: none"> 一緒にやろうね いつも一緒にいたいね | Let's work together | <ul style="list-style-type: none"> Objective Oriented Project Planning (ZOPP) Partnership in development (Donor & Recipients) | With the people (group) |
| 90's | You & I | ・あなたと私の個の確立 | You are the owner of the project(or process) AND I will help you | <ul style="list-style-type: none"> Government Execution Participatory Learning and Action (PLA) Decentralization Ownership | By the people (group) |
| New era | ? | <ul style="list-style-type: none"> ドナー同志は一緒にやろう ? | ? | <ul style="list-style-type: none"> Partnership (Dnor-Donor: common basket, harmonization) PLA Holistic, comprehensive ? | ? |

謝辞

多くの方との議論が本論形成にあたり有益でした。ここに感謝します。

参加型計画手法、プロジェクトマネジメント及び評価についての考察

花田重義 国際マネジメントシステム研究所

1. 研究概要

ODAにおける参加型計画手法（PCM手法）の活用実態に対する考察を試みる。また、PCM手法が持つ特性を分析し、プロジェクトマネジメントの国際標準として位置づけられているISO1006及びPmbok（プロジェクトマネジメントの基礎知識体系）との相互関係を考察し、プロジェクトのモニタリング・評価を考察する。

2. 参加型計画手法の利点と改善点

参加型計画手法（PCM手法）がODAにもたらした影響として、従来、実施者や専門家等の一部の関係者による計画立案から、専門領域外のものを含む利害関係者を含め幅広く論議されることとなった。しかし、一方では計画立案とモニタリング・評価にPCM手法を活用しているが、計画立案時に取り入れられているはずの地域のニーズが実施の過程でどのように変化し、継続性を維持しているか確認する必要がある。PCM手法の運用から数年を経ている現在では時期尚早ではあるが、調査や計画立案のみにワークショップ（WS）を活用すれば、参加型の形骸化が加速される懸念が生じる。日本のODAの制度は参加型を受け入れる柔軟性を備えているか否かなど検証する必要がある。

3. プロジェクトマネジメントへの展開

PCM手法を定着させるには、PCM手法を用いて作成されるPDMに基づいて実施運営を強化し、プロジェクトのアウトプットとしての成果を早期に提示する必要がある。計画立案時の成果PDMに基づいてプロジェクトを実行運営することが急務である。PDMに基づいてプロジェクトを運営管理するにはPDMをプロジェクトのコンセプトデザインであると考え、そのコンセプトに基づいて機能分解を行い、プロジェクト運営管理のためのツールを効果的に取り込む必要がある。PCM手法とISO1006プロジェクトマネジメント若しくはPmbokとのブリッジングを行うことにより、PCM手法が一貫したツールとなる可能性を秘めていると考えられる。

4. 評価とは

ODAにおけるプロジェクトの評価は人の行

う行為であり、客観的評価には一定の限界がある。しかし「良い評価が良い開発を促し、良い開発が良い評価を生み出す」ことから考えると「開発と評価」の間には一定の緊張感が必要である。そのことがODA全体の質の向上につながる。特に対納税者に対する説明責任からODAプロジェクト関係者は逃れることができないことを踏まえると、評価するシステムの構築が急務である。

評価を行う場合のテーマは「評価者」「評価項目」「評価基準」及び「評価システム」のそれぞれを可能な限り客観的で透明性の高いものにする必要がある。そのためには「評価」の対象が「関係者」に対する評価にならないように留意する必要がある。プロジェクトの「結果（パフォーマンス）」を評価し、その中から普遍的な「プロセス」と「システム」の姿を導き出すことが必要である。

5. まとめ

ODAにおけるプロジェクトを参加型による一貫した計画・実行・評価のプロセスを考察し、そのために必要とされるシステムの姿を考察する。

1. プロジェクトマネジメント

PCM手法は参加型計画手法とモニタリング・評価手法から構成されているが、実施の部分については効果的な運営管理手法を提供していない。そこで、ISO (International Organization For Standardization) やPMI (Project Management Institute) が提供している管理体系を基本に参加型運営管理手法を考察するためにプロジェクトマネジメントに関する基礎的情報を紹介する。

ISO (International Organization For Standardization) とPMI (Project Management Institute) はいずれもプロジェクトマネジメントに関する基本的な考え方は一致しているのでここでは「プロジェクトマネジメント手法」として紹介する。

1.1 ISOの組織

ISO (International Organization For Standardization: 国際標準化機構) は1947年に設立されたボランティアにより運営される民間団体の組織で本部をジュネーブにしている。本来この組織は製品の規格を世界的に統一することにより、貿易の促進を意図して設立され、長い間世界の貿易振興に寄与してきたが、東西の冷戦の終結、欧州統合など市場の拡大、グローバル化に合わせて従来の製品規格からマネジメントシステムの規格化へと成長している。

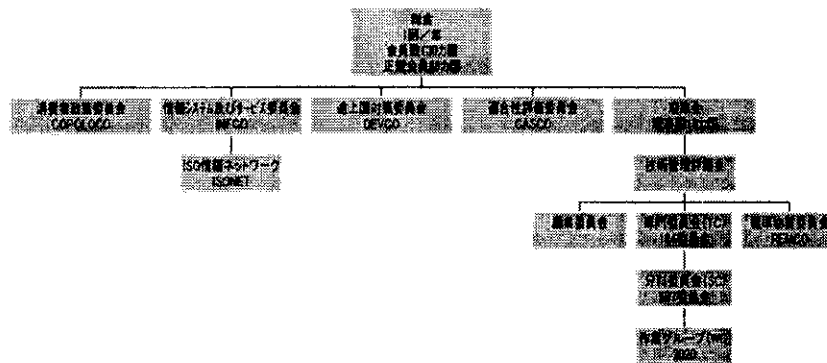
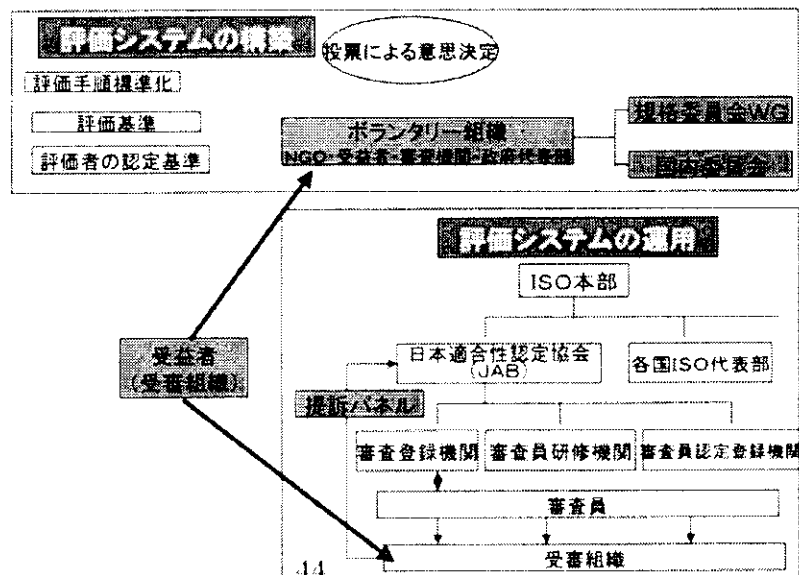


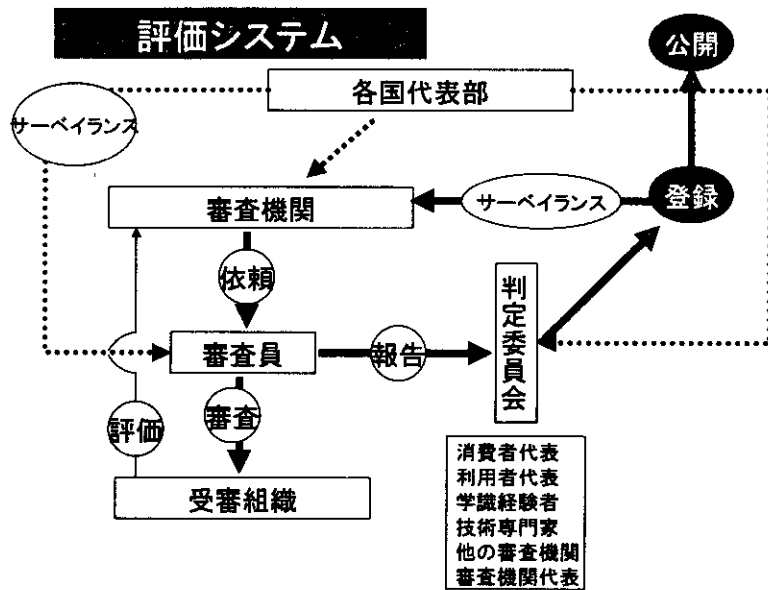
図1-1 ISOの組織

現在、ISOがマネジメントシステムの規格に対して認証制度を有している。認証制度の基本システムは下図のとおり。

このシステムには組織運営のマネジメントに関する要求事項が規定されており、規格に適用した組織運営を行っているかという観点からマネジメントシステムに対する認定という制度が存在

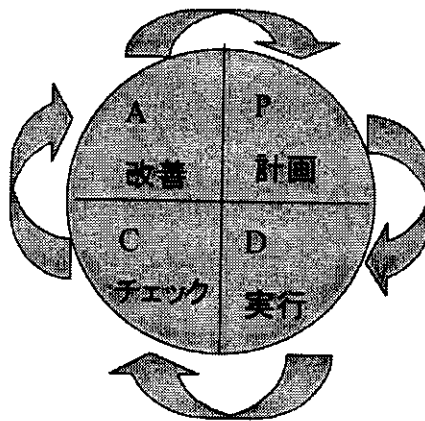


在し、この認定が入札条件として活用されるようになり、世界的な広がりを見せている。評価システムとしては下図のとおりであるが、審査、登録、公開という手続き一貫している。

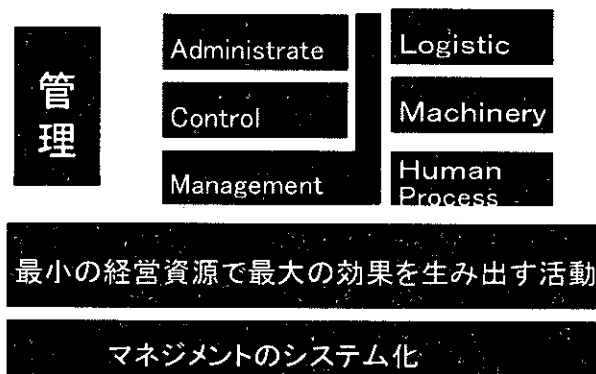


1. ISOマネジメントシステム

ISOのサイクルは下図のようにPCM手法における「計画」「実行」「評価」のサイクルと基本的には同じ構造をしている。異なる点は「評価」を「チェック」と「改善」に区別している点である。

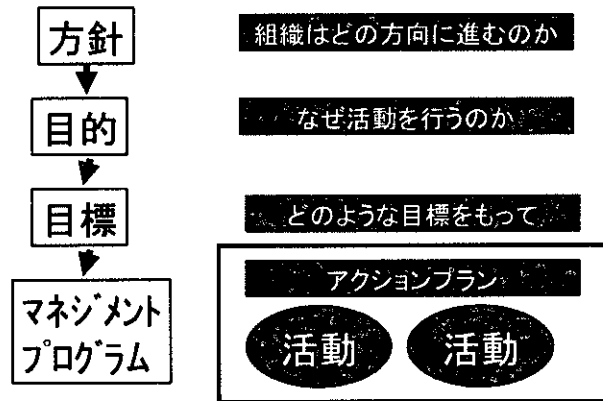


また、管理については管理の対象により下記のように分類すると、管理の方法が異なることが



明瞭になる。

ISOに要求されている方針展開では下図のように方針に基づいて目的、目標と活動などに展開され、PCM手法におけるプロジェクトの要約の形を形成している。



ISO9001 (マネジメントシステム) の規格のベースとなっている思想は下記の8つの原則であり、「透明性」「客観性」「公平性」を維持しようとしている。

- ・ 顧客重視
- ・ リーダーシップ
- ・ 全員参加
- ・ プロセスアプローチ
- ・ システムアプローチ
- ・ 継続的改善
- ・ 事実に基づく意思決定
- ・ 供給者との互恵関係

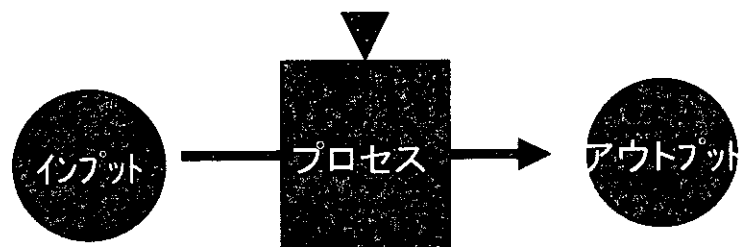
- ・ 透明性
- ・ 客観性
- ・ 公平性

ISO 8つの原則

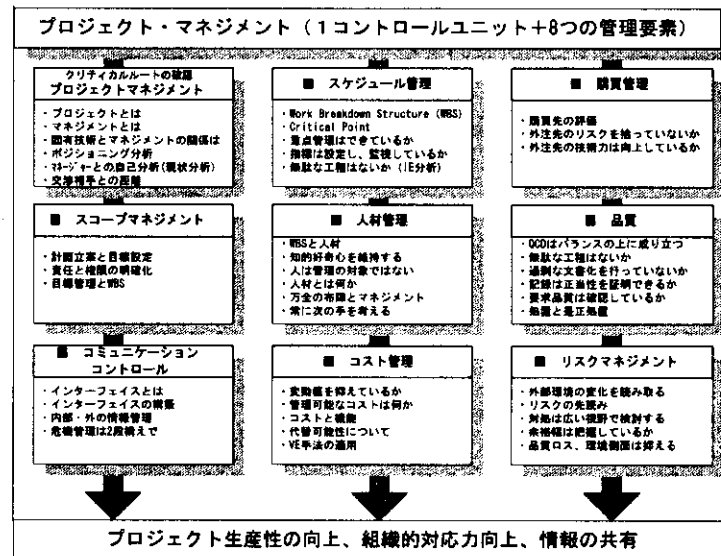
ねらい

2. プロジェクトマネジメント

プロジェクトは一定の投入を行い成果（プロジェクト目標）を達成することであれば、基本的には下記の構造を示している。このプロセスの部分を管理することがプロジェクト・マネジメントとなる。



この規格の10006にプロジェクトマネジメントに関する規格が存在する。規格要求事項をマトリックスで表現すると下記のように1つの統合マネジメント（コントロールユニット）と8つの管理項目に分類され、どのような組織（プロジェクト組織、定常的組織）にも当てはまる。



迅速評価法や参加型評価法の適用に関する研究 「PLA(Participatory Learning and Action)とウオンツ・エイブル分析」

筑波大学社会医学系 平山恵

1. PLAについて

昨今、PLA (Participatory Learning and Action) が国際協力で話題になっている。しかし、これは国際協力の分野だけで語られるものではない。医療の現場においても主役は病者である。医師は病者の健康作りの支援をするものである。国際協力の専門家も主役ではない。そこに暮らす住民が主役である。PLAはその場に生きる当人が試行錯誤しながらも自身を深め、自分達の問題を解決していけるエンパワーメントのプロセスを支援しようという発想である。

PLA という哲学 (考え方) が生まれる背景に「調査」の意味の再検討があった。「誰のための調査か?」「何のための調査か?」という研究者のための調査ではないかという批判があった。主役が調査者であって、住民が調査対象サンプル。その調査結果は有用であったのか。

PLA ワークショップ中だけではなく、それが終わった後で、人々が学び、行動できる「場」を提供する工夫が必要である。PLA ワークショップの体験から、今後の其々の場での自分のあり方を考えるヒントとしていただければ幸甚である。PLA の設定はそのケースによって対応が変わるので、最後に事例に基づきPLAの仕掛けがどのようであったか簡単に紹介する。

ウオンツ・エイブルはPLAの一つのやり方でしかない。また、固定された手法でもなく、状況に応じて変化させながら使うものである。

2 ウオンツ・エイブル分析について

2-1

PLAでは「気づき」「学び」が大切である。地域に生きる一人一人の「考え」や「願い」をまず知ることからはじまる。外部者がすぐに発見できることでも、そこに住む当事者自身が自分の「のぞむ状況」を把握できていないことが多い。ワークショップは気づき、学び、把握を促進する「場」である。当事者が自分の「考え」「思い」「願い」に自ら気づいて、その思いが行動になり、成果を築けるようによそ者がどう介入するか考えたい。また、個人や一社会で出来ない部分を地域や行政の行う支援に反映させるデータづくりを支援したいというのがウオンツ・エイブル分析を開発

した動機である。

2-2 ウオンツ導入の理由

2-2-1. 被抑圧者や受苦者が参加しているか?

PRAの各種ツール、PCM手法やフォーカス・グループディスカッション (以下FGD) など参加型ワークショップの落とし穴に気づいた。いくら多くの人に物理的に参加してもらっていても、ワークショップで意見を行っている人は限られていた。どういう機会にでも大きな声で発言する人が、PRAやPCMワークショップで発言している。「被抑圧者層、受苦者などは本当の意味で参加しているのか?」という疑問がおこった。

次になぜ、参加できないかを考えてみた。日本の東北で、家庭訪問き取り調査をしている時のことを思い出した。奥さんがいたのに「うちは留守だから、聞き取り調査に答えられない」という返事であった。奥さんから意見を聞きたいとこちらが言うと、「私は意見言える者ではない」と言われた。しかし、こちらが「是非、奥さんの意見が聞きたい」とねばって聞き始めると、しぶしぶ答えてくれる。引き続ききいていくと、結構意見をもっていることが分かる。しかし、確かに男性に聞くよりは時間がかかった。こういう質問に慣れていないために、時間がかかるのである。

ワークショップなどでは、グループ活動が多い。人はそれぞれ考えをまとめるのにかかる時間が違うのである。この個々の時間の違いを埋めるためには、個人作業が必要となる。

2-1-2. 問題分析から入ることの怖さ

「問題がない」ところに問題をつくる?

PCM手法では参加者分析の後問題分析を行う。参加者に問題を考えてもらうわけだが、「問題を出して下さい」とモデレーターが言うと、「問題はない」という答えが出てくることがある。そこで、モデレーターは更に「もっとよく考えれば何か問題があるでしょう」と問いかける。これは滑稽であった。問題から入るのではなくて、「どういう状態を望んでいるのか」という質問に変えてみることにした。

2-1-3. より簡単な準備で迅速にでき

5. ウォンツ分析でスタートする5段階立案法（完全WSFCP分析）の流れ

ウォンツ・エイブルはもともと大和信春氏（成人要目研究所所長、「和の実学」著者）の提唱した概念を平山が実践に利用できる形式にアレンジしたものである。ウォンツ・エイブルは以下の5段階立案法（完全WSFCP分析）の1)と4)を使った手法である。この流れを知っておくとウォンツ・エイブルのバリエーションが広がる。

1) 理念設定 WANTS Analysis
ニーズでなく住民の『ウォンツ』を探る。
「～したい」「～でありたい」

2) 現状把握 (Present) SITUATION Analysis
1のウォンツそれぞれに対して現状はどうかを探る。
「～である」「～であった」

3) 未来予測 FUTURE Analysis
1のウォンツと2の現状のギャップより現実にはどうなるか、良くなった場合（プラス方向）と悪くなった場合（マイナス方向）を予測する。
「～となるだろう」

4) 方策立案 COUNTERMEASURE Analysis
3で分析した未来予測のプラスを達成し、マイナスを回避する方法を検討する。
「～する」

5) 実行計画 PLAN of Action
時間軸で実行計画を設定する。その際に行事をメルク・マールにする。
例えばその地域の重要な祭りまでに～をする、卒業までに～をする、など。

- ## 6. ウォンツ使用の心得（注意と覚悟）
- ・極度な非構造的・質的アプローチをとっているため、分析については決してユーザーフレンドリーではない。（しかしこれを乗り越えなければ先は見えないのでは？）
 - ・単独でなく、他の手法と組み合わせる。（今回：スコアリング、木造：系図）
 - ・字が主体なので、自が書けない人や目が見えない人の為には掻き取り隊など

の特別設定が必要である。

ウォンツ・エイブル分析と併用する手法としてはランキング手法である「テンシーズ」や個人のコメントをつける「私の一枚」「今日の発見」などと組み合わせて使用するとウォンツ・エイブル手法が生きてくる。それぞれの使い方は後述の事例で詳細を説明する。

7. 「私」と「私たち」の移動による考程の深化 定番としてのウォンツ・エイブルと投票法の組み合わせ

ウォンツは単独で使えないので、他の手法と組み合わせて使うが、ワークショップを重ねていくうちに、効果的で使いやすい組み合わせが見えてきた。

RRA→ウォンツ・エイブル→テン・ストーンズ（投票法）→グループディスカッション→私の考え→私たちの分類→衆目評価

「私」の作業であるか、「私たち」の作業であるかをつけ加えると、

RRA（外部者）→ウォンツ・エイブル（私）→テン・ストーンズ（私&私たち）→グループディスカッション（私たち）→私の考え（私）→私たちの分類（私たち）→衆目評価（私たちの拡大）となる。

ここで分かるように、「私」と「私たち」を行きつ戻りつすることによって、詳しい「声」が拾えるようになる。これは考程が深まっていることによる。つまりL（学ぶ）の時間が創りだされている。

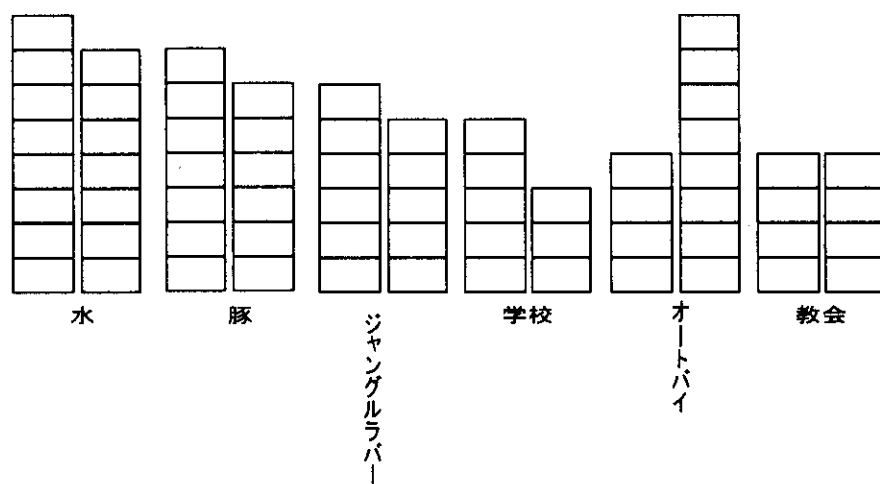
8. 事例

事例1. インドネシア カリマンタン地域総合開発調査

1997年12月インドネシア西カリマンタン州の村落での住民の声を拾う調査を行った。ワークショップ参加者は108人。男女ほぼ同数であった。ウォンツのひとつひとつの意見を巨大棒グラフにあらわし、皆がよく集まる集会所に張り出し、ワークショップに参加できなかった住民の衆目評価もおこなった。また結果は住民の代表が行政のひとつ大きな単位で発表することで、政策提言を行った。

RRA→マッピング→ウオンツ→巨大棒グラフ→テン・シーズ (FGD)

住民の声を届ける 集落→村→郡→県→州→国



事例2. 秋田県西仙北町

ロールプレイと組み合わせて住民の意識化の役に立った。

事例3. 青森県 「木造町「子育てが楽しい町づくり」

青森県西津軽郡木造町において1998年12月から1999年3月にかけて、母親を含めた当事者による母子保健事業の検討、評価を行ない、ニーズに即した支援体制を確立することで、母親の育児不安を早期に解消、安心してできる子育てを可能にし、子供が心身共に健やかに成長することを目的とした、ウオンツ・エイブル法を用いたワークショップを行なった。木造町では平成七年度に「子育てに関する母親意識調査」を実施し、それから研究と様々な試みを続けてきたが、今回は初めて当事者参加型のPCM手法を用いてワークショップ形式でおこなったものである。外部よりの専門家として平山ほかが招かれ、ワークショップのデザイン作りに参加した。

子育て検討委員会は木造町助役を委員長とし、広域的立場から子育て環境を検討するための各関係機関、及び町民を含めた計25名とした。ワークショップは7段階に分けて行なった。

1. ワークショップ、ウオンツ分析、テン・ストーンズとは何か、どのように行なうのかについての平山による講演。ウオンツ分析の実習。
2. 参加者分析。ウオンツ分析のシートを使ってイメージ作り。子育てでもなんでも身の回りで気が付いたこと18項目を埋める。問題を選び、問題を観察し、問題を学習するためには、誰に、どんなことを聞きに行けばよいか考える。

3. 東京大学大学院生が分析した住民調査の結果を各委員が読み取り、その中から問題を選択、問題の重み付けをして誰の問題なのかを考える。問題を「原因—結果」の関係で整理し、直接の原因と思われることを考える。
4. 前回は行った問題選択の中で直接の原因に見落としが無いかが検討する。グループに分かれる。
5. 問題分析。ウオンツ分析にもう一度戻り、それを出した人の身になって考える。各グループで議論を重ねる。
6. 目的分析。ある問題が解決された状態とすると、その原因とされたものはどのような形になるか考察し、その状態を目指すものと位置づける。
7. 解決しようとする方向が定まったところでその手段を考える。グループを統合し、全体として何を目指すのかスローガンを討議する。スローガンは「子育てが楽しい町づくり」となる。

参加者分析→ウオンツ+問題分析+衆目評価→目的分析→シンポジウム

事例4. タンザニア PLA

1) PLAの流れ

- ・ウオンツ・対応案分析
- ・PRA：スコアリング「テン・ストーンズ」& GDで「なぜ、それが気になるのですか？」（背景を掴む）その文化の中での指標（feasible/を参加者が見だし、達成感を味わえるようにして次へのつなぐ。（ここまでは今回できなかった。）

衆目評価：反復読みとり、確認するプロセス

・フィードバック（スタッフ/住民/県/国）説得するための「生の声」の加工法

やはり「水」だった。分かっているで行う意味？プロジェクトとの関わり

・この先、人々は動くか（持続性のしかけ）

2) タンザニア人ファシリテーターのトレーニング

・OJT 評価デザイン・実施・評価

ファシリテーション技術の向上

以下手順で行った。

① スタッフ評価（ウォンツ分析3種類、分析整理、スタッフコミュニティ衆目評価）

② フィールドテスト1回目（Bangalala村）
→ 修正

③ フィールドテスト2回目（Njoro村）
→ 修正

④ 住民参加型評価ワークショップ1実施
Masandare村（参加型アプローチモデル村）

⑤ 住民参加型評価ワークショップ2実施
Makanya村（参加型アプローチ非モデル村）

⑥ 調査結果集計

⑦ 衆目評価デザインの検討

⑧ 衆目評価実施 Ishinde（参加型アプローチモデル村）および Saweni（非モデル村）

⑨ 衆目評価結果集計・分析

上記情報を細くするために、スタッフの一人と短期専門家によりキーインフォーマント・インタビューも行った。対象は各村の森林普及員5人である

⑩ 結果取りまとめと提言の作成

3) ワークショップ内容

対象プロジェクトがそれぞれ異なったアプロ

ーチを行っている。その2種の性格より

マサンダレ村とマカーニャ村です。マサンダレ村の方では村レベルでのPRAを行い、村に環境保全委員会が設置されたりしている所。マカーニャ村の方は、旧来の技術移転的なアプローチを使っている所で、希望者のみを対象に、小規模の苗畑の設置などに協力をしている。

マサンダレ村では午前と午後で男女に分けてワークショップを行い、マカーニャ村の方は、プロジェクトの支援を受けている（小規模苗畑を運営しているなど）人と、支援を受けていない人とは別れてもらった。

ワークショップの詳細流れ：

(1) Village leader (Sub-village

chairman)による挨拶・スタッフの自己紹介

(2) ワークショップのObjectiveの説明

(3) Villagersそれぞれに配布した紙の使い方の説明(上の部分に性別・年齢・職業等を書いてもらう等)

(4) 紙の左半分には彼らのWANTSを書いてもらう(書けなさそうだったら、用意しておいた例文を読み上げる)

(5) 紙の右半分には彼らの COUNTERMEASURESを書いてもらう

(6) 解答用紙をすべて集めて、次のステップ(「10SEEDS」という手法)で使う9つ

のKEYWORDSをピックアップするために集計

(7) Villagersに一人10個ずつ石を集めてもらう

(8) 地面に四角いチャートを描き、9つのKEYWORDSをそれぞれ区切って書く

このチャートを離れた場所に2つ描く。

(9) Villagersに2グループに分かれてチャートの周りに集まってもらい、10SEEDS

のやり方の説明の後、一斉に石を全部置いてもらう

(10) 石の数を参加者で数える

(11)石の置かれたチャートを見ながら、スタッフがVillagersになぜこのような結果になったのか、質問をし、ディスカッションを始める。

(12)お礼としてカレンダーを配布。終わりの挨拶。

4) ファインディング

●ウオント上位ランク

1. 水 2. 家畜の水浴場 3. 家畜の薬 4. 農作物の収穫の向上

●スタッフによって提案された優先的対応策 5点

- ・もっと小規模な苗畑を設定する。
- ・研修を開いて村人が苗畑技術を身につける。研修の際には今回の手法を適所に取り入れてself-relianceを協調する。
- ・県に移管されたら種を売って収入が入るようにする。(現在はどれだけ売り上げが伸びても国庫に納めている。)
- ・水の不足のために農作物ができず、収入を得るための木の不法伐採が多い。また水系感染症にも罹るので労働時間もロスがある。水はKVFPの管轄ではないが、水がなければ木を育てられないので、他のセクターと協力して水の問題に取り組む。
- ・上位にランクされたウオントは行政が補助金等をつけるように働きかけていく。

5) 提言

1. ニーズの掘り起こしだけでなく、現状を分析するためにプロジェクト目的との関連を調査しておく。

真に住民が関われるためには住民の声を拾える、良いファシリテーションが必要である。カウンターパートのファシリテーショントレ

ーニングをプロジェクトの一要素して取り入れる。または派遣専門家にファシリテーションのトレーニングを行う。

事例5. 青森県 百石町「高齢者が安心して生活できる町づくり」(別紙)

A. 情報収集：個別インタビュー、グループインタビュー、自記式質問票、(データの集約)→衆目評価、外目評価

B. 分析方法：1. 得られた「ウオント」を全てカードに写す。その際、一枚のカードにひとつの意味合いの内容を記述。2. 問題を示すカードをビジョンを示すカードに変換し書き換える。3. Visionを示すそれぞれのカードを目的系図に落とす。4. 目的系図に対して、一般住民、高齢者、ケアスタッフから意見を聞き取る(衆目評価)

施策担当者および議会で発表

事例6. イエメンでの調査「移転技術の適正性の再検討：出産行動からの思索」

- ・考える機会を提供するトリガー質問の導入
- ・政策に反映する際の際のよそ者の役割
- ・PLAから学ぶ科学神話(ノスタルジーではなく)

事例7. 吾妻小学校PLAミニワークショップ

2001年1月24日茨城県つくば市吾妻小学校でウオント・エイブル法とテン・シーズを用いたワークショップを行なった。目的は吾妻小学校の児童が学校教育にどのような要望と改善欲求を持っているかを把握し、彼らの視点からの学校教育・学校制度の課題を明らかにすること、そしてその結果を今後の本地域における小学校教育改善のための一助とすること、小学生自身に自分達の学校のあり方を考えてもらうことだった。

対象となった児童は5年生の全三クラス80余名、実施側の参加者は筑波大学教員、同大学学生、同大学大学院生、東京大学教員、JICA職員、ジョイセフ職員、医師を含め24人だった。当日は13時25分から15時25分までの二時間、吾妻小学校5年生1組から3組までの教室及びその廊下で行なった。ワークショップでファシリテーターとしての役割を担ったのは、このワークショップは筑波大学の授業の一環だったため、主に筑波大学学生、大学院生であった。

手順として以下のことを行なった。

1. あらかじめ同年1月12日に吾妻小学校にて対象児童に「学校がもっと楽しくなるにはどうなれば良いと思う？」と質問し、ウオント・エイブルとも15個ずつ書き出してもらった。
2. その中から児童が重要度が高いと考えたウオントを400抽出し、ウオントののったカードを400作成、内容ごとに分類した。
3. 1月24日当日、児童を9グループに分け、400のウオントの中でテン・シーズを行なった。
4. テン・シーズを踏まえ、児童のウオントをより深めるために一回目のグループディスカッションを30分行なった。
5. そのディスカッションを踏まえ「今の話し合いで吾妻小がもっと楽しくなるには何が一番大事だと思った？」と児童に問い掛け、一人一つ用紙に書いてもらった。その内容により児童を新たにグループ分けした。
6. そのグループ分けにより、共通の問題意識を持つ児童が集まったグループで、具体的な改善策を話し合う二回目のグループディスカッションを行った。
7. 児童がワークショップを通じて学んだこと、考えたこと、感想など自由に用

紙に書いてもらった。

10シーズでは、声の小さいもの、発言しない児童に配慮し、意見を汲み取るという狙いがあった。また、前もってウオントデータをクラスに貼っておいたため、児童に考える時間を与え、他人のウオントを気付くという効果があっただろう。私の一枚、今日の発見では、各ディスカッションのまとめとなった。

【衆目評価】

この意見箱はワークショップ実施日以降、児童にWSの振り返りがあること、児童の「行動」を促すことを期待して設置した。

【チャート】

児童がひとり15個ずつ書いたウオント「学校がもっと楽しくなるにはどうしたらよいかと思いますか」のうち、「特に大切だと思うもの」に丸を1個または2個つけてもらい、重要度を2段階で分類した。丸が2個ついたウオントをカードにして、類似していると思われるカードが同じグループに入るように、児童自身の分類を参考にしながらモデレーション・チームがグループ分けし、模造紙にはりつけ、チャートとした。

【テン・シーズ】

このチャートのカード1枚1枚について、児童はひとり10個のブロックを持ち、大切だと思う度合いに応じて投票を行った。児童に対する説明のためのプリントを参考資料として添付する。

児童にはワークショップ当日の4日前から教室前にはったチャートを見てどこに何票投票するか前もって考え、投票用紙にメモしてもらった。回収した投票用紙をもとに児童のテン・シーズの結果をふりかえったのが、「6. テン・シーズ（生データ）」である。また、各オブザーバーが自分のグループの投

票結果をメモした用紙の縮小コピーを参考資料として添付した。

【グループディスカッション】

小集団(本ワークショップにおいては9名)による議論を通じて、他者の意見に刺激を受ける事により自分自身の意見を発展させることを目的とする。グループディスカッション①は、テンシーズの結果をもとにウオントゥが書き出された背景となる現状を把握することを目的に行った。その上で「私の一枚」として各児童に「学校がもっと楽しくなるために一番大切だと思うこと」を一つカードに書き出してもらった。グループディスカッション②は、類似する「私の一枚」を持つ児童をあつめてグループをつくり、具体的な改善策を話し合うことによりPLAにおける行動に結び付けることを目的に行った。二回のディスカッションの後で、児童自身の「考え」「思い」「願い」に自ら気づいてもらうため、「今日の発見」として思っている事を書き出してもらった。グループディスカッションは、本ワークショップのPLAの中心的な役割を担うとともに、モデレーション・チームにとっては、質的なデータの収集を可能にし、言語のみならず言語以外の表情やしぐさなどの情報を収集する事を可能にしている。

【アイスブレイキング】

参加者が集まってきた時、特に初期の頃は、多くの参加者は緊張をして堅い雰囲気の中にあることになる。その時に少しその緊張をほぐし、心も体も自由になるようなちょっとしたゲーム感覚の実習を行う。これを、アイスブレイキングと呼ぶ。初期の頃の、緊張を感じている感覚自身もとても大切な体験学習であり、学んでいく学習の素材であり、プロセスである。むやみに緊張をほぐせばよいというわけではない。できれば、ファシリテーターにはそうした緊張感も大切に扱うだけのス

キルが望まれる。しかし、あまりにも緊張してこちこち状態では、体験学習の体験することさえ、十分行えなくなることさえある。やはり、自由に動いたその体験から、たくさん学べることには間違いない。(出典：「つんつんの体験から学ぼう：津村俊充体験学習ホームページ『つんつんの体験学習用語集』」より)

*用語の説明

「当事者」—ワークショップをすることで利益を受ける人々

「参加者」—当事者を含むワークショップに参加する人々

事例8.

国際理解講座をよりよくするためのワークショップ

2001年2月18日国際理解講座をよりよくするためのワークショップを行なった。目的は、参加者自身が国際理解講座で何を学びたいのか気付き、何が自分達で学べるのか、どのような国際理解講座にすればいいのかわかり、行動に移すことができるよう手助けすることだった。

ファシリテーターとして青年海外協力隊OB・OG、筑波大学教員、大学院生が参加し、ワークショップ対象者は協力隊OB・OG、NGO職員、筑波大学大学院生であった。

手順は以下のように行なった。

1. 自己紹介と全体のルール説明
2. アイスブレイキングと自己紹介
3. 「国際理解教育講座をより有意義なものにするためには」という質問を投げかけ、それに対するウオントゥ・エイブルの表の作成
4. 重要と思われるウオントゥの抽出として、

満足のいくエイブルを自分で見つけられず、自分が重要と思うものを3つ選び、カードに書く

5. 類似するウオンツをグループにわけタイトルをつける
6. なぜそのようなウオンツを持っているのか、個人的な経験を引き出し、グループでシェアするためグループディスカッションを行なう
7. 一人10票を自分が大切と思うウオンツのカードに配分して投票するテン・シーズを行なう
8. 二回目のグループディスカッションを行ない、投票が多いものの理由を分析する。
9. グループごとに全体の前で、このような投票結果になった理由などについて発表する。
10. ワークショップを振り返り、気付いたことをカードに書き、本日の活動を振り返る。
11. ファシリテーターがウオンツ・エイブル法、PLA, グループディスカッションなどの手法や考え方を説明する。